ナイチンゲール　　アンデルセン

中国の皇帝の御殿は、世界一りっぱで美しく、どこからどこまで、高価なせともので できていました。その御殿のまわりの広い庭園には、世にもめずらしい花が、咲き乱れていました。その庭園をどこまでもどこまでも歩いて行くと、大きな木々に囲まれた深い湖のいくつもある美しい森に出ます。森はどこまでも広くて、青々とした深い海の岸まで続いていました。岸辺に生えている木の枝は水の上までのびていました。枝の下には、大きな帆掛け船が入って来ることもできました。その枝に、一羽のナイチンゲールがすんでいました。

ナイチンゲールの歌声はたいそう美しく、貧しい漁師たちは、網を引き上げる手を止めて聞きほれました。

「ああ、なんていい声なんだろう！」と、漁師たちはいいました。

さて、皇帝の都には、世界じゅうから旅人がやって来ました。そして、御殿や庭園を見て感心しました。けれども、ナイチンゲールの歌を聞くと、みんなが、

「なんていい声なんだろう。なんといってもこれがいちばんだ」といいました。そして、国に帰ると、その話をしました。

世界じゅうの学者たちが、皇帝の都や御殿や庭園がどんなにすばらしいかということを本に書きました。その中でいちばん大きくとり上げられたのは、ナイチンゲールの歌でした。

詩人たちは、ナイチンゲールをこのうえなく美しい詩に歌いました。

皇帝は、黄金のいすに腰掛けて、それらの本を読みました。皇帝は満足しました。けれども、どの本にも、「ナイチンゲールこそ最上のものである」と書いてありました。皇帝は、

「そのような鳥がわしの都にいることを、わしはついぞ聞いたことがない。書物で初めて知るなんて」と思いました。そして、侍従をよんでいいました。

「この都に、ナイチンゲールという世にもめずらしい鳥がいるそうだ。今晩にもその鳥を連れてきてわしの前で歌わせてみよ。わしが持っているものを、全世界が知っておりながら、かんじんのわしが知らんというわけにはいかない」

侍従は、

「おそれながら、わたくしはそのような鳥を、うわさにすら聞いたことがございません。けれども、かならず、探し出してまいります」とこたえました。

侍従は、ナイチンゲールのことを知っている者はいないかと、御殿じゅうの階段をのぼったり下りたりして探しました。大広間や廊下をかけずり回って探しました。けれども、だれひとり、耳にした者はいませんでした。侍従は皇帝にいいました。

「それは、本を書いた人の作り話にちがいありません。そのままお信じになりませんように」

皇帝は、

「わしが読んだ本は、日本のえらい天子さまから贈られたものだ。うそいつわりがあるはずがない。わしは、どうあってもナイチンゲールの歌が聞きたい。今晩、ここへ連れてまいれ。さもないと、御殿じゅうの役人たちは、晩ごはんのあと、お腹をどやしつけるぞ」といいました。

侍従は、また、ありったけの階段をのぼったり下りたり、大広間や廊下をかけずり回りました。役人たちも、お腹をどやしつけられたらたいへんと、いっしょになってかけずり回りました。こうして、ナイチンゲールの大捜索が始まりました。

とうとうしまいに、台所で働いている貧しい娘がいいました。

「ナイチンゲールのことなら、よく知っていますわ。わたしには病気の母がいて、海のそばに住んでいます。わたしは毎晩、母にわずかな食事を届けに行くのですが、その帰り道、森の中で疲れて休んでいると、きまってナイチンゲールの歌う声が聞こえてくるのです。それを聞いていると、ひとりでに涙が浮かんでくるのです」

侍従は大よろこびでいいました。

「どうかそのナイチンゲールのところへ案内してくれ」

こうして、侍従は娘といっしょに、森へ出かけました。そのあとから、御殿じゅうの役人の半分が、ぞろぞろついて行きました。

歩いて行くと、雌牛の鳴き声がしました。

「あ、あれだ！」と、役人のひとりがいいました。娘は、

「いいえ、あれは雌牛が鳴いているのです。道はまだまだ遠くです」といいました。

さらに歩いて行くと、沼の中でかえるが鳴きました。

「あ、あれだ！」と、またひとりがいいました。

「いいえ、あれはかえるが鳴いているのです。でももうそろそろですわ」

それからさらに行ったところで、ナイチンゲールの歌が聞こえました。

「ほら、あれです。ほら、ほら、あそこにおります」

娘は、そういって、高い木の枝にとまっている、小さな灰色の鳥を指さしました。侍従は、

「なんと！あんなものだとは思いもよらなかった。なんとまあ、つまらない姿をしているんだ」とさけびました。娘は、ナイチンゲールにむかっていいました。

「かわいいナイチンゲールさん、皇帝さまがあなたの歌を聞きたいとおっしゃっているの」

「それは光栄のいたりです」

ナイチンゲールはこういって、うっとりするような声で歌いはじめました。皇帝がここに来ていると思ったのです。侍従は、

「まるでガラスの鈴のように美しい。ナイチンゲールどの、今晩、御殿の宴会に来てくださらないか。あなたの美しい歌で皇帝のお心をおなぐさめしておくれ」といいました。

ナイチンゲールは、

「わたしの歌は、緑の森の中でお聞きくださるのが、いちばんなのですけれど」といいました。それでも、皇帝の望みと聞いてよろこんでいっしょに行きました。

御殿の中は、それはそれはりっぱに飾りつけられていました。せとものの壁や床は何千という黄金のランプの光を受けてかがやいていました。大広間のまんなかに金のとまり木がおいてあって、そこにナイチンゲールがとまりました。皇帝をはじめ、御殿じゅうの人たちが、ナイチンゲールを見つめました。

ナイチンゲールは、それはそれは美しい声で歌いはじめました。皇帝の目にはひとりでに涙が浮かんできて、ほほをつたってこぼれました。ナイチンゲールは、いよいよきれいな声で歌いました。それは、心の底までしみとおりました。皇帝はたいそうよろこんで、ほうびに、自分の金のスリッパを首にかけてやろうとしました。けれども、ナイチンゲールは、いいました。

「わたしは、皇帝さまの目に涙がやどるのを見ました。それこそ、わたしにとって、何よりとうとい宝物です。ごほうびはもうじゅうぶんいただきました」

それから、また、うっとりするような美しい声で歌いました。

ナイチンゲールは、御殿にとどまることになり、自分の鳥かごをあたえられました。毎日、昼間は二度、夜は一度、散歩に出ることがゆるされました。散歩のときには足に絹のリボンが結びつけられて、それを十二人の召使いたちがしっかり持ちました。

ある日のこと、皇帝のところに、大きな包みがとどきました。包みの上には、「ナイチンゲール」と書かれていました。それは、日本の天子さまからの贈り物でした。開けてみると、中には、作り物のナイチンゲールが入っていました。本物のナイチンゲールにそっくりでしたが、からだじゅうに、ダイヤモンドやサファイアがちりばめてありました。ねじを巻くと、歌いながら尾が上下に動きました。すると、金や銀がきらきら光りました。

「これはみごとなものだ」と、みんなは口をそろえていいました。

みんなは、作り物のナイチンゲールと、本物のナイチンゲールをいっしょに歌わせようとしました。けれども、それはうまくいきませんでした。本物のナイチンゲールは、自分の気の向くままに歌うのに、作り物のほうは、同じワルツばかり歌うからです。

作り物のナイチンゲールは、きらきらと輝きながら、同じ曲を三十三回も歌いました。それでも疲れることはありませんでした。みんなは大よろこびしました。そして、もう一度始めから聞きたがりました。けれども、皇帝が、

「こんどは、生きているナイチンゲールの歌が聞きたい」といいました。

ところが、本物のナイチンゲールは、いったい、どこへ行ってしまったのでしょう。いつのまにか、開いていた窓からとび出して、緑の森へ帰って行ったのを、だれひとり気がつかなかったのです。

御殿の人たちは、ナイチンゲールを恩知らずだとののしりました。そして、

「でも、われわれのところには、それよりすばらしい鳥がいるんだ」といって、作り物のナイチンゲールに歌わせました。御殿の楽長は、作り物のナイチンゲールがすばらしいのは、ダイヤモンドやたくさんの宝石だけでなく、からだの中のしかけだといいました。

「生きているナイチンゲールはいつどんな歌を歌うかわかりません。でも、作り物のナイチンゲールは、いつも同じ歌を歌うことができます。わたしたちは、その仕組みを説明することもできるのです」

みんなは感心しました。

つぎの日曜日、皇帝は、国じゅうの人びとに、新しいナイチンゲールの歌を聞かせました。人びとは、いい気持ちになりました。けれども、本物のナイチンゲールを聞いたことのある漁師たちはいいました。

「なるほど、たしかにいい声だ。けれど、なんだかどこか、もの足りないなあ」

作り物のナイチンゲールは、皇帝のベッドのすぐそばに置かれました。まわりには、贈り物の金や宝石などが並べられました。楽長は、この鳥について二十五巻もある本を書きました。

本物のナイチンゲールは、とうとう、この国を追われてしまいました。

そうこうしているうちに、まる一年がたちました。今では、皇帝や御殿の人や、国じゅうのおとなや子どもたちが、作り物のナイチンゲールの歌をすっかり覚えてしまいました。みんなは、いっしょになって歌いました。ほんとうに、これはたしかに楽しいことでした。

ある晩のこと、作り物のナイチンゲールが美しい声で歌っていました。皇帝は、ベッドに横になって聞いていました。そのとき、とつぜん、鳥のからだの中でプスッという音がして何かがはじけました。そして、ブルルルルと、歯車がみなから回りをして、歌がぴたりと止まってしまいました。

皇帝はすぐにベッドからはね起きて、おつきのお医者を呼びました。けれども、お医者が何の役に立つでしょう。そこで今度は、お使いが、時計作りを呼んで来ました。時計作りは、さんざん調べて、少しは直しましたが、こういいました。

「心棒がだいぶすりへっていますから、よくよくたいせつにとりあつかってください。また、新しい心棒に取りかえることはできません」

何という大きな悲しみでしょう。これからは、一年に一度しか、歌わせてはならないのです。いえ、それでもまだ多すぎるというのでした。

それから、五年の月日がたちました。今度は、ほんとうに大きな悲しみが、国じゅうに広がりました。皇帝が病気になり、もう長くは生きられないといわれたのです。もう新しい皇帝が選ばれました。

皇帝は大きなりっぱなベッドの中に、冷たく青ざめて横たわっていました。侍従や役人や召使いなど、御殿の人たちはもう皇帝がなくなったと思って、部屋を出て行きました。あたりは、ひっそり静まり返っていました。

ところが、皇帝は、なくなったのではなくて、からだをこわばらせてじっと寝ていただけだったのです。皇帝は息をするのもやっとでした。まるで何かが胸の上に乗っているような感じでした。そこで、目を開けてみると、胸の上に死神が乗っていました。死神は、頭に皇帝の冠をかぶり、片手に皇帝の金の剣を持ち、もう片方の手には皇帝の旗を持っていました。

ベッドのまわりの大きなビロードのカーテンのひだのあいだから、ふしぎな顔がいくつものぞいていました。みにくい顔もあれば幸福そうなやさしい顔もあります。それらの顔は、皇帝が今までやってきた悪い行いやよい行いでした。そのひとつが、皇帝に、

「あなたは、わたしを覚えていますか」とききました。すると、つぎのひとつが、

「わたしのことは覚えているでしょうね」といいます。それぞれの顔がつぎからつぎへとささやきました。みなでいろいろのことを話すので、皇帝の額には、思わず汗がにじみ出ました。

「そんなことは、何も知らない！」と、皇帝はいいました。そして、「音楽だ！音楽だ！この者どものいうことが聞こえないようにしてくれ」とさけびました。けれども、みなはしゃべりつづけました。皇帝は、作り物のナイチンゲールにむかっていいました。

「これ、幸せの金の鳥よ。どうか歌ってくれ。おまえには黄金もやった。宝石もやったではないか。どうか、歌ってくれ！」

けれども、作り物のナイチンゲールは、だまって立っているばかりでした。だれもねじを巻いてくれる人がいませんでした。ねじを巻かなければ、この鳥は歌いません。死神は、大きなうつろな目で、皇帝をじっと見つめていました。あたりはひっそりと、気味の悪いほどひっそりと、静まりかえりました。

そのとき、とつぜん、窓のすぐそばで、それはそれは美しい歌が聞こえてきました。それは、あの、生きているナイチンゲールでした。いま、窓の外の木にとまったところでした。ナイチンゲールは、皇帝の病気のことを聞いて、希望となぐさめを歌って聞かせようと、はるばる飛んできたのでした。ナイチンゲールが歌うにつれて、ふしぎな顔がだんだんうすらいでゆきました。そして、皇帝のからだの中に生き生きと血がめぐり始めました。

しまいには、死神までが、

「もっと歌いつづけるんだ。小さなナイチンゲール」といいました。ナイチンゲールは、

「ではそのかわり、皇帝の冠をくださいますか」といいました。死神は、冠を渡しました。それから、歌をひとつ聞くたびに、金の剣も、皇帝の旗も渡しました。

ナイチンゲールは歌いつづけました。それは、真っ白なばらの花が咲き、ニワトコの花がにおい、青々とした草が涙でしめる静かな墓場の歌でした。死神は、それを聞くと急に自分の庭が恋しくなって、冷たい霧のように、ふわふわと窓から出て行ってしまいました。

皇帝は、

「ありがとう。ありがとう。かつて、わしは、おまえを追いだした。それなのに、おまえは、わしのベッドからあやしいものどもを追いはらってくれた。死神さえ、わしの胸の上から取りのけてくれた。どんなほうびをあたえればいいのだろう」といいました。

ナイチンゲールは答えました。

「ごほうびはもういただきました。わたしが初めて歌をお聞かせしたとき、あなたの目に涙が浮かびました。わたしはあのことを決して忘れません。あれこそ、歌人の心をよろこばせる宝石です。でも、今は、おやすみになって、また元気になってください。何かひとつ歌ってさしあげましょう」

そして、歌いはじめました。皇帝は安らかに眠りました。

やがて、日がのぼると、皇帝はすっかり元気になって目を覚ましました。御殿の人たちは、皇帝はもうなくなったものと思って、だれもそばにいませんでした。ナイチンゲールだけが、ずっと離れないで歌っていました。皇帝はいいました。

「いつまでもそばにいておくれ。気の向いたときだけ歌ってくれればよい。こんな作り物の鳥なんか、こなごなに打ち砕いてやる」

ナイチンゲールは、

「そんなことをしてはいけません。この鳥も自分でできる限りのことをしたのです。今まで通り、そばにおおきなさい」といいました。そして、

「わたしは、いつもおそばにいることはできません。わたしは、貧しい漁師のところへも、お百姓の屋根の上へも、ここから遠く離れたどんなところへも飛んで行きます。そして、わたしの好きなときにここにやって来ましょう。夜、この窓のそばの枝にとまって、あなたの考えが豊かになるように歌いましょう。幸せな人たちのことや苦しみ悩んでいる人たちのことを歌いましょう。あなたのまわりにかくれている悪いこと、よいこ

とについても歌いましょう」といいました。

皇帝は、立ち上がり、衣装を身に着けると金の剣を胸に当てました。ナイチンゲールは、

「ひとつだけ、お願いがあります。あなたに何もかも告げる鳥がいることを、どうぞ、だれにもいわないようにしてください。そうすれば、いっそううまくいくでしょう」といって、飛んで行きました。

しばらくして、御殿の者たちが、なくなった皇帝をおがみに入ってきました。そして、その場に立ちすくみました。皇帝はいいました。

「おはよう」

村上郁再話